

## はじめに

この本を手にとっていただき、ありがとうございます。

突然ですが、あなたは今人生の旅路のどのあたりにいらっしゃるでしょうか。

艱難辛苦を乗り越えて、やっと希望の光が見えてきた地点、もしくは、まさに困難な旅のまっ最中で、ふと休憩がてらこの本に出逢っていただけたのでしょうか。

私とは言いますと、実は後者の非常に困難な人生の局面に相対しています。

詳しくはブログなどで吐露していますのでここでは割愛させていただきますが、堂々巡りをくり返しつつも人生って頑張れば自然と浮上していくよね、と信じているうちに、あれよあれよと希望とは真逆の方向へ。

とどめとも言える事象が一昨年夏の夏に起こり、否が応でも自分自身を掘り下げざるを得なくなりました。

今までの生き方はまちがっていたのだろうか？

越えられないハードルはやってこないと言うけれど、今回ばかりは無理かもしれない。

そんなふうに悶々と自問自答をしていると、ある日相棒のようなもう一人の自分が現れました。

この本に綴った詩のような散文のような66編は、もう一人の自分からの叱咤激励ともエールとも言える言葉です。

ある日ぽんっと、頭を抱える私の肩をたたいてささやいては消えていく。

それはまるで、黒い煙でいっぱいになっている心に、小さな煙突ができた瞬間のようでした。

上がっては下がり、下がっては上がる。

気持ちはまだまだアップダウンする毎日ですが、この本の一編でも、あなたの心に風穴が空いて、まあいっか、と感じるきっかけになれば嬉しいなあと思います。